

川越中学校初代校長 増野悦興の謎 (三)

滝澤 民夫

陸軍軍医総監となった鷗外森林太郎は、一八六二(文久二)年に津和野で生まれた。東大医学部時代には日本で初めて精神病学を講じたベルツの教授を受け、文部省留學生としてドイツに派遣された。一九三二(大正一一)年に文学者として六〇歳の生涯を終えた。

キリスト教の新神学を主張した雷軒増野悦興も、一八六五(慶応元)年に津和野で生まれた。鷗外に遅れて三年、西周や鷗外らを輩出した藩校養老館は維新によって廃校となっていた。同志社で新島讓の薫陶を受け、キリスト教の宣教師としてアメリカンボードの援助でアメリカに留学した。教育者としての夢を果たせぬまま四六歳で他界したのが一九一一(明治四四)年である。

近代文学を確立した漱石夏目金之助は、一八六七年に東京で生まれた。東大文学部を卒業後、愛媛県立中学(松山中学)教諭などを経て、やはり文部省からイギリスに派遣された。一九一六年に新聞小説を連載しつつ四九歳の生涯を閉じた。

整理すると、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、森林太郎の帰国後に増野悦興が、増野の帰国後に夏目金之助が海外留学をしてゐる。三人の共通点は、明治の知識人として強い国家的社会的使命感とともに、近代化のなかでどう自我や人格を形成するかという課題と苦悩を内面にもったことである。鷗外と漱石は国民的作家として知られてゐるが、キリスト者増野は不遇な生涯ゆえに埋もれてきた。けれども、増野悦興が提起し

た教育者としての思想は検討に値する。

一八九九年に設立された埼玉県第三中学校の教育方針は「自治自修」であった。増野はこの精神を掲げて川越中学校を作り、青年教育に生涯をかけようとした。誰がこの理想主義者を川越に招き、どうして新進校長は三年で川越を去らねばならなかったのか。そして、三三歳の増野はこうした発想をどこで身につけたのか。

創立者新島を敬愛した増野は、卒業直前にアメリカ人教師と対立して九名の仲間と同志社を退学した。教育者新島は死の直前に、不憫な愛弟子を母校であるボストンのアンドヴァー神学校へ派遣することを決めたと思われる。増野はボストンとカナダ境のバンゴアの神学校で計三年間学んで帰国し、牧師を経て教育界に転身した。



増野悦興の直前
1889.10.24.
(同志社大学蔵)

二〇〇四年夏、増野の足跡を訊ねて北米のワシントン、マサチューセッツ州ボストン、メイン州バンゴアへ出かけた。ロサンゼルスからワシントンに向かう機中で、眼下にはグリーン田舎の畑が延々と続いていた。米国の農業を象徴するスプリングクラウのついたこの巨大な畑では何が生産されているのか。一八九〇年八月九

日、二四歳の増野は単身、横浜港を出発してサンフランシスコ経由でボストンに向かった。開通直後の大陸横断鉄道にどんな思いで揺られて行ったのであろうか。

ワシントンでは、合衆国国立公文書館で入国記録のマイクロフィルムを検索したが、保存が一八九三年分からしかなく、結局入国月日の確認はできなかった。ポランティアの年配の女性が親切に案内をしてくれた。なお、日本の外務省外交史料館では旅券番号が確認でき、ご遺族増野潤吉氏が外務大臣青木周蔵発給の旅券を保管しておられた。

ボストンでの調査には、ハーバード大学の大学院生リック・デラさんの協力を得た。入試は難関で六〇〇人に一人だそうだが、リックさんはアンドヴァー・ニュートン神学校の図書館などで本を探してくれた。めざす本は公共図書館の特別書庫にあることが判ったのだが、二日半待つて見つからなかった。気落ちした私を彼は郊外の大きな書店に連れて行き、インターネットで古本を検索してくれた。一八九九年の初版本が三冊あることが分かり、どうしても見たいというので、約三五〇〇円だったが、立て替えて購入してくれた。

増野悦興・咲子夫妻の長女文子は川越で生まれた。増野の人生の最も輝いていた時期であった。しかし、一九〇八年に文子は五歳で夭折してしまふ。悲嘆にくれる妻を励まして、増野は「BISHOPS SHADOW」という本を抄訳させ、「シオドル物語」として出版した。咲子は神戸女学校で九年間キリスト教主義教育を受けた聡明な女性であった。訳出本は国立国会図書館にあったのだが、今回探しに行ったのがその原本だった。九月に入

って、くすのき祭が終わってほどなく、リックさんから本が届いた。浮浪児から身を立ってボストンの聖三一教会の監督牧師のフィリップス・ブルックスの半生記であるこの本は、神戸女学院(神戸女学校の後身)図書館にもあることがその後判明した。

ボストン郊外のアンドヴァー・フィリップス校で寄宿舎のパートレットホールを見つけたときは感動した。赤レンガの壁には建設当時の石の銘板「M D C C C X X (一八二〇年)」がはめ込まれていた。かつて新島や増野らが学んだ同校は現在米国有数の私立高校となっており、敷地は川越高校の五〇倍ほどである。パートレットホールの脇には本校のくすの木ほどの楡の大木がゆったりと枝をそよがせていた。



アンドヴァー神学校パートレットホール。
増野は26号室に起居していた。

メイン州バンゴアは緯度度というと宗谷岬辺に位置する。冬季は零下二〇度の豪雪地帯で、木材の集散地であり、現在はリゾート地でもある。アンドヴァー神学校初級クラスに一年間学んだ増野は、新神学(自由神学)界気鋭の組織神学教授ストルンス(スターンズ)の「頭脳と心情」に心酔して、はるばるバンゴア神学校まで出かけた。一四年前に陸路を馬

車でか、海路を船でか。強い信心と学習意欲と若さどが行動させたのだろう。ボストンからバンゴアまでは三五人乗りのジェット機で空路一時間弱だったが、ニューハンプシャーからメインにかけての東海岸には針葉樹林帯に湖沼が点在する原野が広がっていた。

新神学とは聖書無謬説をとらず、たとえば、マリアの処女懐胎やキリストの復活は歴史的事実ではないとしたうえで、信仰を深めようとする立場であり、アンドヴァー神学校、ハーバード神学校、バンゴア神学校は自由主義神学の拠点でもあった。組織神学とは、キリスト教の教義と倫理を学術面から系統的真理として表明する神学であった。増野が新神学に魅せられたことは、帰国後アメリカンボードの同志社系教会との乖離を生むことになる。期待をになつての米国派遣であったが、増野はいわば異端児として帰国することになる。

ところで、この厳寒の地で増野は胸を患い、臥せる日々となった。しかも、毎朝講義の前に見舞ってかれていたストルンス先生がインフルエンザで急逝してしまう(「亡師ストルンス博士を弔悼す」基督教新聞「四五三号、一八九二年四月一日」)。傷心のまま、アンドヴァーにもどった増野は翌年三年間の勉学を終えて帰国した。したがって、アンドヴァー神学校は正式には卒業しておらず、同窓生名簿には「NON-GRADUATES」として記されている。増野悦興は「新英州」(ニューイングランド)で、「自由・自治・自活の民」の精神を学んできたのである。

増野悦興のアメリカ留学時代の調査の詳細は、川越高校「紀要」四一号(近刊)に報告した。